



牛来 美佳さん(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：3月10日

故郷・浪江への思いを歌に込めて この福島の厳しい現実を風化させないためにも

牛来さんは、長女の凛音ちゃん(6歳)と2人で群馬県太田市に暮らしています。

震災後は、郡山市や新潟県新発田市などを20名を越える親族が一緒になって移動し、共同生活を送っていました。現在は、福島に住むご両親とも離ればなれで暮らしています。この3月には、浪江への思いを込めて牛来さんが初めてレコーディングした曲『浪江町で生まれ育った。』がリリースされます。

あの地震のあと、私たちは親戚と一緒に郡山市や新発田市などでそれぞれ2週間ずつ過ごしました。4月末には郡山に戻ったのですが、原発事故のことが気になり、私と一人娘の凛音だけ、土地勘のあった太田市に5月末ごろ移り住みました。時折、車で両親のいる福島に戻りますが、震災前とは異なり、みんなバラバラの生活です。た



美佳さんと凛音ちゃん
HPも見てみてね
<http://mica-gorai.jimdo.com/>

浪江から遠く離れて暮らしてみても、あらためて自分のまちがどんなに素晴らしいところだっ

だ、同じアパートには福島から避難された方がいます。その中に浪江で毎年開催されるストリートミュージックフェスタでお世話になっていた榎谷宏美さんご夫妻もいます。いつも相談に乗っていただけることが本当に心強いです。

震災直後は、家族、友人などがバラバラになったことが信じられず、心の整理がつかまませんでした。そんなとき、ふるさと浪江への思いを歌いたい気持ちが強くなり、一つの詩を作りました。郡山市のライブハウスの店長さんの後押しもあり、この3月にオリジナルCDを出すことになりました。私のような者にも何かやれることがある。そんな思いを伝え、浪江の皆さんに前向きになってほしいという。そして、被災地の外の皆さんにはこの福島・浪江の厳しい現実を忘れてほしくないという思いからこの曲を作りました。ぜひ多くの方に聞いていただきたいです。

たかを実感しています。私は春の桜祭りの桜と花火をもう一度見たいです。桜の上に広がる花火がとても美しかったことが懐かしいです。海もある、山もある、そしておいしいものがたくさんあった浪江町。新鮮なお魚や野菜を浪江ではご近所さんで譲り合っていたのに、こちらではあたり前のことですが毎日お店で購入しなければなりません。浪江は本当に豊かなまちだったのだと思います。

私はまだ仕事も得られず不安が多いですが、とりあえずはこの春の子どもの小学校入学が一番の気がかりです。娘も親としての私も初めての経験です。子どもはよく親を見ています。だからこそ、自分自身がしっかりして、前向きに元気に生活していかなければと思っています。

浪江のこころ通信

第10号

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

浪江のこころ通信 / 第10号 への感想をお寄せください。
【連絡先】〒976 0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243 22 4261





鈴木酒造店長井蔵 鈴木 大介さん(請戸)

取材者：浪江町役場 近野
取材日：2011年12月17日

2011年内に「壽」を届けたい

浪江町に180年以上続く造り酒屋である「鈴木酒造店」。酒蔵は津波で流失してしまいましたが、県の試験場に蔵の酵母が残っていた。その酵母を使い、7月上旬には南会津の蔵を借りて約2,000本の「壽」を出荷する。

その後本格的に製造拠点を探していたところ、山形県長井市に休止している酒蔵があることを知る。最後まで福島県内での再開を模索したが、何としても2011年のうちに浪江の皆さんに「壽」を届けたいとの思いから、その酒蔵を引き継ぐことを決意。12月19日には新たな蔵で仕込んだ「壽」の初出荷を迎えた。



大介さん(前列左)と社長の市夫さん(前列右) 弟の荘司さん(後列左から3番目)らと一緒に。

新天地への葛藤
南会津の酒蔵で製造した約2000本の「壽」は、町民の皆さんにとっても喜んでいただききた。そして、「また壽が飲みたい、造ってほしい」という励ましの言葉をたくさんいただき、本格的な製造を決意しました。福島県内での再開を目指し、新たな拠点探しを始めましたが、福島県内で新たに酒蔵を建設する場合、建設から製造認可まで一年以上かかることがわかりました。福島県内で再開したいと

いう気持ちの一方で、いち早く町民の皆さんに「壽」を届けたい。なんとか2011年内に新酒を出荷したいという強い思いもありました。ちょうどそのころ、山形県長井市に昨年まで酒造りをしていて、休止した酒蔵があることを知り、早速見学に行ったところ、作業動線が考えられていてとても使いやすい造りで、しかも最低限の改修ですぐ酒造りを再開できるようになっていました。福島県内での再開は最後まであきらめられませんでした。

酒造りの再開
新たな酒蔵が決まり、すぐに改修を行いました。まったく土地勘のない地域でしたが、地元の方々以前からお世話になっていただいた方に協力いただき、

浪江町の蔵は津波で流失して、警戒区域が解除されてもすぐに戻れるかどうかはわかりません。しかし、浪江に戻るために酒造免許は浪江に残したままです。そのためにも、長井市での事業を早く軌道に乗せたいですね。



松本サチ子さん(請戸)

取材者：特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル 齋藤、柴田
取材日：3月13日

「また請戸の海を眺めたい」

松本さんは、昨年1月に夫の征夫さんを亡くされ、3月13日の四十九日の準備をしていた矢先の震災でした。息子さんと一緒に3月18日に山形市に避難し、征夫さんの新盆を迎える8月に借り上げ住宅に入り、現在は家族2人で暮らしています。

私たちの家は、隣に2mくらいの堤防がありその隣はすぐ海で船がたくさん泊めてあります。ふつうは地震が起きたときテレビで津波警報が流れば堤防に上がって海の様子を見ますが、その日はあがりませんでした。これは絶対に津波がくると思いましたが、地震に備えて用意していた貴重品を持って、向かいのおばさんに声をかけて、一緒にすぐに大平山に避難しました。漁協組合に動いていた息子とは、サンシャイン浪江で無事に会うことができず、その後、息子と親戚と一緒に津島、川俣町へ避難して、3月18日に娘の親戚のいる山形県山形市に避難しました。着るものは避難所ですとどいたいただきました。サンダル履きで着の身着のまま避難したのでありがたかったです。

見つけたときは嬉しかったです。山形は今年大雪で、出かけるのが大変でした。気候の穏やかな浜通りを思い出します。でも、車の修理が終わって戻ってきたので、雪が溶けたら自分で運転して出かけたと思っています。山形では、避難所で一緒に過ごした皆さんと温泉に行つて話ができる会を楽しみにしています。先日、福島の仮設に住む友人や親戚に会い食事できました。親しい人とあひさつしたりお茶飲みしたりとか、そういう絆がないのは不安ですが、娘夫婦や孫も夏に遊びに来てくれ、息子も山形と一緒に生活できるので今は安心です。



現在お住まいのアパートで

仕込みができるまでになりました。改修に合わせて、震災前から構想していた、通年で仕込み・出荷ができる冷蔵設備も整備しました。

蔵の改修と並行して、11月上旬から弟夫婦とともに仕込みを始めました。仕込みでは山形県の米を使うことになりましたが、今後は浪江のころと同様に契約農家から仕入れた酒米を使う予定です。また、長井は水が良いので、水の良さが出ていると思います。

この酒蔵では「壽」の他に、地元の方に向けて、元々の酒蔵で造っていた「一生幸福」という銘柄を造っています。地元のお酒を引き継いで造っていくことで、山形県の皆さんにも応援していただきたいと思っています。



株式会社 マツバヤ 代表取締役社長 **松原 茂さん**(権現堂)

取材者：浪江町役場 長沼・嶋原
取材日：3月10日

人の力の大きさとつながりを感じて
前向きに再オープン

昭和2年に日用・雑貨品店として曾祖父が創業された松葉屋は85年の歴史を持ちます。サンブラザは昭和54年に開業し今年で33年目。地元で密着し、子どもからお年寄りまで浪江町民の憩いの場でした。4代目の松原茂さんは、さまざまな困難にも常に前向きに人を大事にする気持ちで進み、3月8日にみんなの希望を乗せて新たなスタート切りしました。



スタッフの皆さんと一緒に(中央が松原さん)

震災時は店にいました。店はガラスが一部割れたのみで被害は少なく、夕方には臨時休業にしたものの、翌日9時に集合と従業員に話しました。その後、避難を余儀なくされて、家族と一緒に原町、飯館、福島、山形、新潟と移りました。5月に郡山に仮事務所を置いたため、新潟の家族と離れて単身生活をしています。はじめは店舗の再開は難しいと思いましたが、ベテランスタッフは会社と一体化してやっている方たちで、お店を立ち上げようという強い思いがありました。5、6月から継続的に物件の情報収集を始めました。その一方で、7月に南相馬市にカーブスをオープン。9月には福島二本松、本宮の仮設住宅で、カタログから注文を取ってお届けする御用聞き販売と、テントでの衣料・野菜の移動販売を始めました。また、10月に本部事務所を二本松に移転し、11月にネットショップも立ち上げ、2月にはカーブスを相馬市に移転しました。サンブラザを船引でオープンすることにしたのは、まとまった売り場面積とバックヤードがあること、人口が浪江町と同じくらいでお客様の雰囲気も似ていて、市場性・マーケットの可能性を感じたこと、そして、ふねひきパークさんが「一緒にやりましょう!」と、バックアップを申し出てくれたことでした。オープンにあたっては、専門性が高

いスタッフを集めなければならなかったのですが、中通りに避難していたスタッフも多く、声を掛けると一緒にやりましょうと言ってくれました。スタッフの力は大きかったですね。スタッフたちの頑張りには本当に感謝しています。あらためて企業は人で成り立っていると感じました。スタッフもお店をやる喜びを感じてくれていました。商品や工事、システム作りなどさまざまな苦労を乗り越えてオープンしたので、あとは前へ進んでいくだけです。これはゴールではなくスタートだと思っています。拠点が一つでき、これからの可能性が広がってきました。何カ月かけて品揃えも充実させていきたいです。ネット関連の事業も伸ばしていきたいし、仮設住宅等での御用聞き販売も進めていきたいと思っています。オープンときは、浪江や双葉郡のお客さまからたくさんのお言葉をかけていただきました。サンブラザを始めたいことで、皆さんの復興しようという気持ちのプラスになってくれれば一番うれしいです。



荻野ジュニア バレーボールクラブ 監督 **菊地 晃さん**(荻宿)

取材者：浪江町役場 長沼・嶋原
取材日：3月10日

一緒にバレーボールをしませんか

荻野ジュニアバレーボールクラブで監督を始めてから5年目の菊地さん。二本松市に奥さんと3人のお子さんとの5人で暮らしています。昨年の10月から仕事を再開し、クラブも10月から本格的に活動を開始しました。「誰かがやらないとやれないこと。できる限り続けていきたい。今、出来ることをやっていきたい。」と力強く話してくださいました。

震災時は勤務先の一樹デザイナーセンターで仕事をしていた。初めて体験する強い揺れに利用者さんが動揺しないように声をかけ、揺れがおさまるのを待ちました。地震のあと今度は津波がくるという話を聞き、利用者さんと一緒に荻野小へ避難しました。夜になり、食料もあり電気もつくということで、会社の方で一晩を過ごしました。次の日、利用者さんの家族がきて原発が危ないことを知り、利用者さんと職員と自分の家族と一緒に津島から避難先を転々としてきました。3月22日に最後の利用者さんを無事家族のもとへ送り届け、その後、岳温泉に避難し、今は二本松市の借上げ住宅で暮らしています。浪江では荻野ジュニアバレーボールクラブの指導をしていました。岳温泉にいた4月に、クラブのメンバーから「外で遊べない。バレーボールがしたい。」と言われたことがきっかけとなり、「体育館でバレーを通して遊ばないか。」と、声掛けをしました。二本松市役所に相談して初めてお借りしたあたらしく小

学校では、小学生から大人まで12、13人が参加してくれました。練習を重ねると子どもたちの「試合に出たい。」という思いも強くなり、10月に県へ登録してクラブとして始めました。現在は、原瀬小学校を拠点として、土曜日の9時から12時までと火曜日の18時から20時までで活動しています。現在のメンバーは8人です。もともとメンバーだった子どもだけでなく、新たに始めた子は土曜日だけの活動をしています。子どもたちは体を動かしているのと表情が違います。練習はつらいこともありますが、勝ったときの子どもたちの表情がとてもいいです。6年生が他県に避難していませんが、上の子が下の子に伝えていく以前と同じ縦のつながりもできました。そんな子どもたちを見ている保護者の方々も一生懸命サポートしてくれまます。これまで大会には5回出場しました。2月に相馬で行われた福島県小学生バレーボール新人大会には双葉地区から唯一の出場でした。県大会には進めませ



クラブのメンバーと菊地さん。一緒に始めてみたい方は、役場スポーツ少年団担当(☎0243-62-0123)までご連絡ください。

んでしたが、次の6月の大会を目指していきたく思います。子どもは元気に動いているのが本来の姿だと思うので、ぜひたくさんの子どもたちに参加してほしいです。小学校1年生から6年生までの女の子を募集中です。娘がクラブに入っていたことで始めた監督ですが、できる限り続けていきたいと思っています。今は高校の部活動をしている娘に、「監督のあとを継ぐからそれまで続けてほしい。」と言われています。



参加したみなさんの感想

色々なお話が聞けたり、懐かしい顔が見れて楽しい時間がすごせました。自分の思っている事、考えている事を、冷静に聞いてもらえて嬉しかったです。浪江の情報があったので参加してよかったです。

私の思っていた要望事項を伝えられる機会があった。県外に避難しているとなかなかこういった機会がない。

無駄話のようでも顔を見ておしゃべりする大切さを痛感しました。楽しかったです。溜まったストレスが解消されました。

同じことを思っている人がいて少しホッとしました。つらいと思っているのは自分だけじゃないんだという気持ちと、溜まっていた事を吐き出せた事でストレスの発散になりました。知っている人がいなかったのは少し残念。

気分転換できて良かった！

今後このような機会があれば嬉しいです。

一人で悩んでいたことが皆さんの話を聞いて楽になりました。

久しぶりになつかしい人に会えてホッとしました。

大変良かった。家族、職場以外で人と話すのがなかったためこういう機会は良い。

学生の皆さんが私たち被災者のために真剣に取り組んでいる姿に感謝したい。

「なみえの“しゃべり場”」以外の交流会にも、たくさんの町民の皆さんにご参加いただいています。



浪江白河ネットワークの皆さんが中心となり開催
(白河市会場)

懐かしい話に笑顔がこぼれます。
(会津地方交流会)



お茶を飲みながらゆっくりお話。たくさん浪江の方に会えます。
(左:郡山市会場 右:仙台市会場)



なみえ絆いわき会が中心となり開催
(いわき市会場)

福島市会場にもたくさんの方が集まりました。



みんなで一緒に話そうよ

県内外各地で町民の皆さんが集える交流会が開催されています。各地の交流会の様子をお知らせします。皆さんも参加して、一緒に話しませんか。

交流会に関するお問い合わせ
生活支援課避難生活支援係
☎0243-62-0123

今後の日程は、決まり次第お知らせします。



東京会場

なみえの“しゃべり場”

「なみえの“しゃべり場”」が、東京都や埼玉県など県外で開催され、各会場たくさんの「浪江のなかま」が参加しています。

「なみえの“しゃべり場”」は、高崎市域震災復興支援委員会の協力のもと開催しており、全体のコーディネーターとして、高崎経済大学の櫻井常矢先生をお迎えしました。当日は、同大学の学生の皆さんが参加し、町民の皆さんの浪江町への思いや困っていること、不満、悩み、お願いなどさまざまことを伺いました。



大学の学生さんと一緒に(埼玉会場)



各会場にキッズルームが設けられています。お子さまと一緒にの参加もお待ちしております。

各テーブルで大学の学生さんが聞き取りした内容を、会場の皆さんと共有しています。



各会場とも浪江町の写真が展示されています。

当日プログラム(各会場共通)

- 13時 開場
- 13時30分 開会
浪江の今を説明します
浪江の風景写真などをご覧ください
しゃべり場スタート
- 15時30分 閉会

* 閉会後も16時30分まで開場を開放しているので、自由にお話できます。

スクリーンに浪江の懐かしい写真が映し出されています。
(新潟会場)

